

# アトリエ 琉游舎 だより 140号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2022年9月21日発行

曼珠沙華咲いて ここが私の寝るところ  
 歩きつづける 彼岸花咲きつづける  
 なかなか死ねない彼岸花咲く



- 種田山頭火は自由律俳句を多数残した流浪の俳人です。彼は彼岸花（曼珠沙華）を詠んだ句を多数残しています。放浪の伴としていたのか、自分の人生に重ね合わせたかのようです。
- 彼岸花はちょうど秋の彼岸の頃一斉に花が開きます。葉のない茎の先にまず花がつかます。彼岸のころいきなり茎がスーと伸びて花を咲かせ1週間も経たずに花が終り茎が枯れてしまうと、今度は葉が伸びて緑のまま冬越しをします。畦道やお墓やお堂などでよく見かけます。
- 観光名所となっている彼岸花の群生地、埼玉県日高市にある巾着田に一度山歩きのついでによったことがあります。咲いていない時期はただの原っぱです。春のさくらと同じように花の盛りは短く後はなにも存在感を主張しないところが、人の心を動かすのでしょうか。
- 山頭火の自由律俳句をいくつかあげていきます。「いつまで生きる 曼珠沙華咲きだした」「歩きつづける 彼岸花咲きつづける」「なかなか死ねない彼岸花咲く」「曼珠沙華咲いてここが私の寝るところ」彼岸花は彼の放浪の道連れのようなのです。今年も曼珠沙華が咲き出した。私も性懲りもなくまだ生きている。私が彼岸花を求めているのか、彼岸花が私の訪れを待ち望んでいるのか、私はただ歩き続け、彼岸花はただ咲き続けるだけ。彼の放浪中の寝る場所はお寺のお堂だったのでしょう。「なかなか死ねない」で今年もまた彼岸花の咲く季節まで生きてきてしまった。「ここが私の寝るところ」は一夜の宿のことか、それとも永遠の眠りの場所なのか。自由律俳句はある芸術観に支えられた情景写実ではなく、その時々心のありのままを写しとった写真のようです。読むものにも自由な読み方を促してくれます。
- あと数句、目についたままに。「悔いるころの曼珠沙華燃ゆ」「うつりきてお彼岸花の花ざかり」「お彼岸のお彼岸花をみほとけに」「彼岸花さくふるさとはお墓のあるばかり」山頭火独自の死生観に支えられた彼岸花の句と思い取り上げてみたのですが、どうやら違っているようです。「仏」「放浪」「孤独」「死」「故郷」「墓」などの言葉に隠された、彼独自の「生きていること」をありのままに受け入れそのままに写し取った句のように思えます。

**写経会** 般若心経・自我偈・観音偈の手本  
**10月2日(日)**を用意しています。初めての方も  
**13時半** すぐにできます。

**読書会** 法華経を読んでいます。2回目の法華経読書会です  
**9/27・10/18** 分かり易く楽しい会です。資料はすべてご用意いた  
**(火)13時半** します。皆さんの参加をお待ちしています。

**9月22日・29日・10月6日・27日の映画会はお休みします**

10/13 木	13時半	マルコ・ポーロの冒険 (104分)	ゲーリー・クーパー主演。ベニスの貿易商の父親に交易を命じられ、中国の地を訪れたマルコは肯定フビライ・ハンの娘クチカン王女に一目ぼれしてしまうが、、、
10/20 木	13時半	南部に轟く太鼓 (86分)	ジェイムズ・グレイグ主演。南北戦争で南軍と北軍に分かれて戦う友人のグレイとウイル。デビル山の攻防戦について二人は直接銃口を向け合うが、、、

3連休前日の会津駒ヶ岳登山口の駐車場は平日にも関わらず朝の7時前には満車でした。林道の路肩に20台ほど駐車できるスペースには東京・横浜・長野や富山ナンバーの遠来の車で一杯。恐らく夜を徹して車を運転し、ここで仮眠を取って早朝登山を開始したに違いありません。私はここまでは2時間少々の道のりなので、余裕を持って5時前に出発したのですが、山登りにかける気持ちが少々劣っていたのか、駐車スペースを見つけることができず、Uターンして林道を少し下った場所に車を止め、届けを7時10分に提出して登山開始です。

登山口からの2時間半ほどはただひたすら急登を上りつめ、やっと見晴らしのあるところに出ます。すると駒ヶ岳の名前の由来通りの馬の背の山容があらわれ、木道と階段の緩やかな登りを、その雄大な景色と伴に頂上を目指します。登り3時間半の道のり。最近山歩きの機会が減り、標高差1100メートルの山行も久しぶり、年齢による衰えと日常的な運動不足の不安を覆い隠しながら、いつものように頭を空っぽにして一步一步足を上に向けて進めていきます。陽ざしが強く気温もどんどん上昇していく中、聞こえるのは熊除けの鈴の音と、ラジオの声だけ。登山道は非常にきれいに整備され、熊笹も刈られて歩きやすい道です。途中3ヶ所ほど休憩用のベンチがあり、水分や栄養補給中に登山者同士の情報交換が始まります。連休前日からの2日間が久しぶりに好天との予報で、急遽山行を決めた単独行の人達が数人。秋田の測量士は、夜中8時間をかけて近くの道の駅に辿り着き、2時間ほど仮眠を取って登り始めたとのこと。明日は燧ヶ岳に登るので、どのルートがよいかと山形から来たとおぼしき人と話をしていたので、昨年燧ヶ岳に登ったときの経験を情報提供しました。しかし私には駒ヶ岳の翌日に燧ヶ岳に登るようなことは絶対に不可能です。実際、この文章は山行の翌々日に書いていますが、未だに段差のあるところは「よいしょ」とか「いててて」とかのかけ声をかけないと歩き始めることができているのですから。私には百名山踏破や何座制覇などの具体的な目的はなく、ただ登ることが楽しいので登っているだけなのです。頂上の天気が悪くて何も見えなくても、がっかりすることはありません。天候が悪くなれば躊躇なく途中で切り上げます。このところの山行は山頂からは何も見えないことが多かったのですが、今回は快晴の素晴らしい天気でした。360度の眺望、山の名前を特定できる場所は、日光白根や男体山など地元栃木の山々ですが、福島や新潟の山々まで見渡すことができました。ただ不思議なことに10キロほどしか離れていない燧ヶ岳はそこだけが雲に覆われて見ることはできませんでした。

山は不思議と出会う場所。山を下りて疲れ切った体で真っ先に考えることは、次はどの山に登ろうかということ。下山したばかりの山に何か忘れ物をしてきた気持ちにさせられ、性懲りもなくまた同じ山に登りたいと思うこと。登ることが楽しいと言ってはみたものの、何が楽しいのかよく分からないこと。スポーツドリンクより水が、カロリーメイトより梅干しが疲労回復には優れていること（私の場合だけかも知れません）。登りは楽しく、下りは苦痛でしかないこと。歩いていけば必ず頂上に着くということ。せつかく頂上についても、必ず下山しなければいけないということ。もうこれ以上歩けないと思っても、必ずまた歩き出していること。山を見ればどんな山でも登ってみたいになってしまうこと。山は不思議を受け入れ示してくれる場所。

「思議」とは思うことや議論をすることです。「不思議」は「不可思議」の略語で「思議」できないこと、考えを思い巡らすことができないということです。仏の智慧や神通力、仏のはからいなど、言語・思慮の及ばない境地をさしている言葉です。私たちが社会の中で他者とともに生きていくためには「思議」することが必要です。状況を見て考え判断し、言語にして他者に提案し議論することによって社会秩序が保たれていきます。民主主義は私たちの「思議」に支えられているのです。「思議」はイデオロギーを生みます。そのイデオロギーが例えば正義や人権や富や愛国心を基盤に成立したものであっても、必ず合意とともに対立も生み出します。それは「思議」が人間の理性や感情に寄って立つ人間のための「思議」だからです。人間のためという「思議」は容易に国のため、資本のため、党派のため、教団のためという「思議」に変貌していくことは自明のことでしょう。それが社会に秩序をもたらす、権力と富の基盤ともなるからです。

私たちは「思議」だらけの社会の中で生きて行かざるを得ません。常に考え議論し合意形成を目指す努力をし続けないと、あっと言う間に他者と対立するか、従属するかを選択を迫られてしまうのです。「思議」に追われる毎日は、私が願い誓い行う信行の毎日と正反対の、心が千々に乱れる毎日です。私たちは生きる限り「思議」から逃れることはできません。しかし「不思議」に私自身の全てを投げ入れ受け入れてもらうことによって心の安らぎを得ることができるのです。それが「信」です。お釈迦様のありのままのはからいを信じそのままに生きる（行う）ことです。親鸞は「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて念仏申さんと思いたつ心のおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり。」<sup>注1</sup>と語っています。彼は不思議な阿弥陀の誓願を信受するとき誰一人残すことなく絶対の安らぎに生かされると信じたのです。すべての衆生を救うという阿弥陀仏の誓願を不思議と信受することが親鸞の信仰の全てです。それは彼と彼の宗派だけのものでなく、全ての仏教徒は仏の願いを「不思議」と受用し、その仏のはからい、大いなるもの、ありのまま、真如、自然法爾、のそのままに毎日を生き続けることが、お釈迦様に帰依する人々の信仰です。それがありのままの信行の日々です。思議に追われる 琉游舎：戸井 出流・恭子  
毎日の中で、不思議を受用する「観」と「心」が錆び付いていないか、そんな 問い合わせ：0287-53-7848 08033508152  
な時、山に出かけると「山の不思議」は何の思議もなく私の前に立ち現れ 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850  
てきます。これがきっと私が山に行くことのものでしょう。 注1：歎異抄 メール：toi10lizuru@outlook.jp